

津田内匠

『ヴァンサン・ド・グルネのメモワールと書簡』

Mémoires et Lettres de Vincent de Gournay, éd. par Takumi Tsuda, Economic Research Series No. 31, The Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, Tokyo, Kinokuniya, 1993, xxxv+230 pp.

本書は同じ編者により10年前に出版された *Traité sur le Commerce de Josiah Child et Remarques inédites de Vincent de Gournay* (Tokyo, 1983) の続編あるいは補遺にあたるものであり、同じく、編者の発見になるサンブリュ市立図書館所蔵のグルネ文書などから編纂されたものである。本書には編者による詳細な解説のほか、第1部にグルネのメモワール8点と断想1点、第2部にグルネがモルバ、モルレ、テュルデヌにそれぞれあてた書簡計3点、第3部にグルネが通商監督官の職席にあったときの行政書簡124点が収録されている。

グルネ (Vincent de Gournay, 1712-1759) は、チュルゴの『ヴァンサン・ド・グルネ賛辞』(1759年) などにより、「自由放任」(レッセ・フェール、レッセ・バセ) の提唱者としての側面のみが、なかば伝説化して伝えられてきた。ひとつにはグルネ自身が著書を公刊しなかったせいである。したがって、グルネ研究は資料の面で強く制約されざるをえなかった。この制約を打ち破り、本格的なグルネ研究に道を開いたのが、編者の津田内匠氏による、失われたと伝えられてきた *Traité*…を含むグルネ文書の発見であった。グルネはジョサイア・チャイルドの『新交易論』(1693年) の仏訳出版(1754年) にあたって、チャイルドの原著にも匹敵する膨大な「注解」(Remarques) をつけ、みずからの経済ビジョンを披瀝したが、この部分は結局、公にするのを禁じられ、手稿のまま眠っていたのである。グルネの主著ともいべきこの「注解」では、国内の独占的特権や産業規制に対して戦いをいどむ「自由放任」の闘士としてのグルネは、一方で、オランダやイギリスの経済的優位に挑戦する保護主義者の側面をあらわにする。ここで彼は金利の引き下げを求め、航海条例や関税政策などにより「デンマーク人やスウェーデン人が築いたのと同じ城壁」を築いて国内産業を保護することを求めた。こうして、自由と保護の両面政策を特徴とするグルネの経済ビジョンの全体像が浮き彫りにされた。

18世紀中葉のフランス経済は二つの問題状況に直面していた。ひとつは躍進を遂げつつあるイギリス経済の側圧の高まりであり、もうひとつは、それにもかかわらず国内では独占的特権や産業規制を特

徴とするコルベルティスムの古い体質が根強く残り、経済諸要素の自在の展開が抑圧されていたことである。富の増大のためには、生産力と販路(生産と消費)を同時に拡大する就労人口の増加がなにより求められた。これを阻む独占や産業規制などを排除し、就労の自由を保障することで、就労機会を拡大し、労働力の流出を防ぐとともにその流入を促さねばならない。国際経済の場で争われているのも、就労人口もしくは雇用である。グルネは、「数には数、力には力をもってあたらねばならない」状況のなかで、「隣国と人間のバランスを争って、できるだけ多くの人口を引き寄せることほど榮えることはない」と考える。しかしフランスのように経済的に遅れをとった国では、この争いに勝利することは容易ではない。遅れをとった国では、生産力の相対的な未熟さと交易上の不利との因果的悪循環に悩まされるからである。したがって、国内での「自由と競争」の原理は、交易の不利を克服し悪循環を断ち切るための慎重な配慮と連動したものでなければならなかった。ここに政策当局の重要性と当局による保護・干渉政策の必然性が導かれる。グルネが交易を「国家的大事業」とみて、内外商業を統轄する交易評議会の設置を求めたのも、また航海条例などの保護主義的政策を提唱したのも、このためであった。遅れた国では、インダストリーの自律的發展に期待する余裕はない。遅れの原因を除きつつ、それを人為的に促進してでも生産力の拡大に努めねばならない。この点では「個別的利益は常に一般的利益に従属」しなければならなかったのである。

「注解」を通じて浮き彫りにされた以上のようなグルネの「自由と保護の経済学」の基本は、フランス経済の現実に対するその危機意識とともに、グルネを取り巻く多くのエコノミストたちに共有のものであった。グルネの発見は、一方で、津田氏の一連の労作やその労作に刺激された海外の研究者の諸研究を通じて、グルネ・サークルの多彩なエコノミストたち、ブリュマル・ド・ダンジュール、フォルボネ、モルレ、チュルゴ等の1750年代の活発な知的活動を照らしだし、こうして従来ほとんど顧みられることのなかった『経済表』直前期のフランス経済学の特徴的な相貌を、一挙にあらわにしたのである。

おそらくダンジュールの『商業とその他の国力の源泉にかんするフランスとグレート・ブリテンの利点と不利点の考察』(1754年) は、この時期のフランス経済学のひとつの特徴をもっともよく物語る文献であろう。それは、ダンジュールがグルネの指示により、同時代のイギリスの経済学者、ジョサイア・タッカーのほぼ同名の著書によりながら、英仏の生産力の格差をフランスの側から細かに比較分析したものである(本書の第1部の5番目のメモワールはこの著作と関連があると推定されている)。要するに、先進イギリスを強く意識しながら、農業生産力に偏らず生産力一般をどのように拡大するか、問題

はこの1点に集約される。論者による差異を無視していえば、この時期のフランス経済学は、後進フランスの立場からながら、貨幣の重視、「一国の利得は他国の損失」など理論的には伝統的な重商主義の粉飾をまといつつも、方向としては、人々のより高いレベルの消費欲求の充足を目指す、生産力主義あるいは産業主義を志向していたといえよう。かれらの就労人口論あるいは就労バランス論はまさにそのようなものであった。

このようにグルネおよびグルネ・サークルの経済ビジョンが浮き彫りにされたことで、ケネーおよび重農主義の研究に偏りがちであった18世紀フランス経済学の研究に、より豊かな肉付きが与えられることになった。たとえば、カンティロン(その主著の出版にグルネが関与したと考えられている)は重農学派の先駆者としてだけでなく、一面でグルネ等の経済ビジョンにも直接つらなるものとみること、従来いわれてきたカンティロン経済学の二面性(重農主義の側面と重商主義の側面)の意味をより明確にすることができる。ともあれ、ケネー『経済表』の登場とともにグルネは表舞台を退くことになる。しかし芽ぶいたばかりの生産力主義あるいは産業主義が、ケネーの登場とともに消えてなくなったわけではない。重農学派の観念的な自由貿易論に基づいてイギリスとの間に結ばれたイーデン条約(1786年)の失敗により、重農学派の観念性、非現実性が露呈されるに及んで、グルネ等がかつて唱えた現実的な生産力拡大路線がふたたび日の目を見ることになる。すなわち、グルネ等の「自由と保護の経済学」あるいは津田氏のいう「レッセ・フェールの原理に基づく柔軟いディリジスム」は、重商主義という硬直的なレットルを超えて、より高いレベルの消費欲求の充足を目指して農業生産力に偏らない生産力一般の拡大を求める生産力主義あるいは産業主義の源流として、19世紀フランスの経済思想の展開に直接つながっていくのである。こうして、津田氏によるグルネの発見を契機として、フランス経済学の見失われていた道筋があらわになったのである。

さて、本書は *Traité*s…の出版以降、以上のような展開をみせてきたグルネ研究を側面から支えるものである。第1部の最初の3つのメモワールでの議論は「注解」と同じであり、航海条例、利子率の引き下げ、自由と競争の原理などの実践的な適用を説いたものであるが、第5と第6のメモワールでは「注解」からの若干の進展がみられる。第5のメモワールはすでに述べたように、タッカーのやりかたをまねてグルネみずからが英仏の経済事情を比較したものであり、ダンジュールの著書との関連が推定される。彼はここではもはや航海条例の制定や利子率の引き下げは求めない。第6のメモワールはイエズス会による精糖工場の建設にかかわる争論を扱った興味深い論稿である。タッカーやダンジュールは無為な聖職者の多さをフランスの不利点のひとつに数え

たが、グルネは「自由と競争」の原則に立って、こうした不利を一举に有利にかえようとする。かれらは模範的な労働者であり、「わが国の技芸や交易のライバル諸国に、いまだ戦わざる強力な予備軍を」(p.76)立ち向かわせよう、と主張するのである。ナントの勅令の撤回によって失われた労働力を取り戻そうと、なりふりかまわぬ就労人口の増加策が唱えられている。編者のいうように、そもそも経済的自立性をもたない聖職者の事業をライバル諸国に立ち向かう切り札とせざるをえないところに、グルネの限界は明らかであろうが、かえってそれゆえにわれわれは、グルネの生産力への強いこだわりと生産力競争を戦う後進フランスの状況に対する深い危機意識をみることができよう。

*Traité*s…および今回の *Memoires*…の出版は、日本の研究者のなしうる貢献のなかでもっとも稀有なもののひとつに数えられよう。新資料の発見という事実によってよりはむしろ発見された資料の価値ゆえにである。18世紀フランス経済学の展開を語るときはいうまでもなく、先進・後進にかかわる諸問題あるいは産業主義の起源を語る時、グルネとグルネ・サークルおよび日本で出版されたグルネの2つの著述を、もはやだれも無視することはできないであろう。

[米田昇平]